

県立施設の連携の取り組み状況と考え(県立各施設へのアンケート調査の結果)

参考資料

県立の施設名	平成18年度施設間連携 (同種施設または他分野施設、他の県施設や市町・民間施設等)		
	連携事業と連携先 (どの施設と、どんな事業をしたか)	成果	課題
三重県立博物館	別紙2「平成18年度 市町等との連携・移動展示・出前授業等の実施状況」を参照してください。	1 市町及び他館・期間との協働・連携 (1) 展示会関係 ・自然環境室との共同展は、前年度まで共同調査を行った県内稀少生物調査の成果を公表。 ・県総文・カモシカセンターとの共催展は、当館収蔵資料のアウトリーチ展示として公開機会が増加。 ・県内博物館などへの資料貸出協力は、当館収蔵資料の公開機会増加と、当該館の展示充実を支援。 (2) 博物館フィールドワーク事業関係 ・開催場所の市町との共催により、地元の自然・歴史への再認識と生涯学習の機会提供、また、他市町域からの参加者をつうじての当該自然・歴史の情報発信に寄与。 (3) その他 ・県博物館協会加盟館職員の資質向上を支援。 2 県立博物館移動展示 ・当館収蔵資料のアウトリーチ展示として、県民により身近な場所での公開機会が増加。 ・開催場所の市町・施設との共催により、地元の自然・歴史の再認識と学習機会の機会提供、また、移動展示を核として開催施設や関連施設での文化事業の展開などに寄与。 3 学校との連携 ・子どもたちに、授業だけでは学べない、自然・歴史に関する実物資料に触れる機会や専門性の高い学芸員の話しを聴講する機会を提供することにより、学校教育の充実を支援。	博物館フィールドワークのうち、自然観察・調査など広域的なフィールドでの実施により一層の成果が期待できるものに関しては、より多くの関係機関・人々との連携による県内一斉調査などの実施も検討する必要がある。 移動展示について、現在の当館資料のアウトリーチ展示主体の在り方から、連携先である地域の市町・施設・団体の活動が主体となり、これを支援・連携する方向への移行を検討する必要がある。 学校との連携について、連携事業の周知、学校側のニーズ把握をすすめる必要がある。また、今後、学校連携を促進するためには、既存予算・人員で対応している現状では限界があるので、新たな予算措置・職員配置などが必要である。
齋宮歴史博物館	1、明和町内六小学校と連携しての出前授業 2、三重県科学技術振興センター鈴鹿水産研究室・被川環境保全全体会議等と連携しての「被川-その歴史と自然-」展の実施 3、(財)三重県文化振興事業団と連携しての「能『絵馬』と齋宮」展およびレクチャー講座、関連史跡散策ツアーの実施 4、三重県松阪県民センター総務・生活室および松阪紀勢界隈まちかど博物館推進委員会と連携しての「松阪紀勢界隈まちかど博物館」展の実施 5、明和町中央公民館「押し花講座」と連携しての「押し花」展の実施 6、明和町観光協会と連携しての齋宮ガイドボランティア事業の実施 7、中古文学会と連携し、創設40周年記念大会での展示・発掘現場の見学・貴重資料熟覧などを実施 8、スポーツ振興室と連携し、新体操ワールドカップにあわせてサンアリーナで齋宮関係展示を実施 9、(財)三重県文化振興事業団と連携し、M祭に参加 10、「帝王の道活性化協議会」と連携し、各地のイベントでPR事業を行った。 11、明和町教育委員会と連携して「ちやれんじきっず」企画「梅干しづくり」、「栗まんじゅうづくり」、「新春書初め大会」を実施した。 12、齋宮跡観光協議会と連携し、「第3回いつきのみや梅まつり」を開催し、博物館への集客交流を図った。 13、大阪事務所と連携し、三重県関西連携交流会議にミニ展示ブースを開設し、齋宮のPRを行った。	・出前事業は各小学校六年生の社会科および地域文化を知る授業に寄与した。 ・被川展は32日間実施し、1,408人の見学者があった。期間中に「被川探検隊」も実施した。 ・「能絵馬」と齋宮」展は18日間実施し、891名の見学者があった。またレクチャー講座は94名、散策ツアーは60名が参加した。 ・「松阪紀勢界隈まちかど博物館」展は14日で1,807名の参加者があった。 ・「押し花」展は16日間実施し、753名の参加者があった。 ・齋宮ガイドボランティアは月例の連絡・学習会を行うとともに5,322人の史跡来訪者の案内を行った。 ・中古文学会見学会は約100人の参加者があった。 ・明和町教育委員会との連携企画「ちやれんじきっず」では、4回の企画で親子152名の参加者があった。 ・「第3回いつきのみや梅まつり」は、約1,500人の人出で賑わいました。 ・その他各種イベントで齋宮歴史博物館の広報を行った。	個々の事業はほとんど事業費がなく、消耗品費のみで行っていると言っても過言ではない。そのため事業の宣伝は県の広報、館からの印刷物、ホームページでの情報発信などしか行えていない。また連携先も効果的な広報手段を持つわけではないので、アンケートを見ても、実施自体が十分に周知されていないのが実情である。しかし、(財)三重県文化振興事業団との連携は連携先の広報能力により大きな効果が期待されたが、開催期間が客足の落ちる十二月だったこともあり、必ずしも十分ではなかった。情報公開や実施時期など、検討すべき課題は少なくない。
三重県立美術館	・三重県文化会館と連携したミュージアムコンサートの開催 ・三重県立図書館と連携した広報活動の実施 ・いなべ市、松阪市と連携した移動美術館の開催 ・伊賀市、鈴鹿市の公立学校と連携した学校美術館の開催 ・県立志摩病院、鈴鹿回生病院と連携した「三重ホスピタル・アート・ギャラリー」開催	・美術館外での活動を通じて、日頃美術館を訪れることが困難な県民に美術鑑賞の機会を提供した。 ・学校美術館の開催を通じて、時代を担う子どもたちが優れた芸術作品に直接触れる機会を提供した。 ・ミュージアムコンサートによって、美術の近接領域を紹介するとともに、新たな来館者を開拓した。	・予算と職員削減に伴い、特に美術館外での教育活動関連のプログラム実施が困難になりつつある。
三重県立図書館	「おしごと広場みえ」(生活部所管)と連携し、平成19年度上半期の「県立図書館カレンダー」に、同機関の利用案内を掲載し、平成19年2月から利用者等に配布を開始した。	「おしごと広場みえ」をより多くの方に紹介することができた。 この取り組みを一つの契機として、県庁各部局との連携(チラシ等印刷物の館内での配布)が進んだ。	例えばカレンダーの取り組みでは、図書館の利用者に他施設の事業等を紹介する一つの方法として有効であったと考えているが、県立図書館自体が情報発信や魅力向上のための取組が求められている中においては、県立図書館にも連携の成果が具体的に現れるかたちでの連携のあり方、事業を追求する必要があると考えている。
三重県総合文化センター	別紙3「三重県総合文化センターの連携の取り組み」を参照	連携することにより、事業が活性化されるとともに、新しい顧客層が開拓できました。	連携事業の多くがアウトリーチ事業であるため、人的要因により回数が限定される。
三重県生涯学習センター	・みえアカデミックセミナー 公開セミナー (県内14高等教育機関との連携) ・みえアカデミックセミナー 移動講座 (県内7高等教育機関、7市町との連携) ・まなびいすどセミナー (齋宮歴史博物館、県立高校、三重県文化会館、三重県専修学校協会、三重県科学技術振興センター、三重県環境学習情報センター他多数との連携) ・市町連携講座 (御浜町、明和町、紀宝町)	センターが培ってきたネットワークを活かし、多様な講座を実施することで、生涯学習に対する県民の幅広いニーズに応えることができた。 また市町に移動してのアウトリーチ講座を開催することにより、「誰でも、どこでも、学ぶことのできる生涯学習社会の実現につながった。	三重県の生涯学習の振興を推進する中核施設として、事業の更なる質的、量的拡大(例:モデル事業の実施と発信、人材育成事業など) 第2次三重県生涯学習振興基本計画に則った「学び」を活かす仕組みづくりとその提供(調査研究事業)
三重県熊野古道センター	県立博物館と共催で、開館記念特別企画展「絵図にみる巡礼道中の人々」を開催した。 (平成19年度については、三重大学人文学部との間で、教育、文化、学術等に関する相互連携協力協定を締結した。(4月26日))	・東紀州地域をはじめとして、県内外から多くの来場者(17,551人-2月10日のオープンから3月31日まで)があり、熊野古道や西国巡礼などへの関心を深めることができた。 ・博物館の移動展示の一環として、開催した企画展であり、博物館が持つノウハウがその後の企画展開催に役立った。	昨年度2月開館した新規施設であり、指定管理者による管理であることから、まだまだ他施設との連携が不十分であり、人的なネットワークづくりも含めて、交流を促進する必要がある。
三重県埋蔵文化財センター	・津市教育委員会と共催し、第25回三重県埋蔵文化財展「北畠氏とその時代」を開催。 ・齋宮歴史博物館と共催し、第5回みはち考古学者だ！展「三重の大昔へタイムスリップ」を開催。 ・県科学技術振興センター農業研究部と連携し、「農大祭&西山農業祭り」に参加し、発掘出土品の展示及び土器を実際に手で触れる体験、粘土板に文様をつける体験を実施。 ・県環境学習情報センターと連携し、こどもかんきょう体感フェア2006「Meちびっこエコ王国大会」に参加し、「縄文土器模様付け」体験を実施。 ・県内小中学校や市町文化施設、公民館等へ発掘出土品の展示や古代玉作り体験などを含めた出前講座の実施。 ・県庁舎や県庁県民ホールを利用した各地の発掘調査出土品のロビー展示。	・発掘調査等の出土品などを公開し、あるいは出前講座等でそれらを実際に手に触れることで、子どもを中心に文化財を身近に感じさせた効果は大きい。 ・他分野施設等と連携することで、独自事業では集客が望めない多様な価値観をもつ人々に対して、歴史や文化財への興味を喚起させる機会の提供ができた。	・埋蔵文化財センターは、齋宮歴史博物館との共用スペースが大部分で、各種事業を当センター施設で実施する場合には行程上の制約が生じることが少なくない。また、施設間連携のために割ける人員も不足している。 ・当センターには、発掘調査の出土品などを中心とした資料が膨大に蓄積されており、それらの公開活用に対する機会は十分ではない。 ・学校関係へ出前講座を中心として、小中学校との連携機会は徐々に増えてきているが、県立高校や私立学校などとの連携は十分とはいえない。